

大学

ビーチバレーサークル

ラブラブ

乱交日誌

第2話

ペニスをヒクつかせる男子たちはもう準備万端で、同様に女子たちの小さなワレメは早くもちよっぴり濡れて、男子たちの巨根の受け入れる準備態勢に入った状態となっている。

つい先ほどまでビキニを着て真夏の浜辺で爽やかに飛び跳ね、走り回っていた6人が、一転して全く別の状況下にいる。小さなお風呂屋さんで全裸になり・・・ビーチバレーならぬ大乱交の火ぶたを切ろうとしているのだ。

6人はそのまま近づき・・・。

「この体に興味があるんでしょっ？ほら、あたしたちの体あんたたちにあげるって言ってるんだからさ、優しくしなさいよねっ！」

女子たちはヒクつく男子たちのペニスの先端が自らの腹部にくっつく距離まで近づき、そして体の側面に下ろした男子の手を自分たちの胸に持っていった。

「どうっ？おっぱいの感触・・・柔らかいでしょ??？」

女子たちが無理やり手を持っていったことで、女子たちの柔らかい乳房の肉に男子たちのごつい掌が食い込んでいく。

ムギユウウ。

男子たちはもう自己抑制の限界に達してしまった。

「俺たちのチンポ、舐めてくれよお!!!」

声をそろえてそう叫んだ。

「んちゅ・・・結構男子たちのこの・・・ヌチュブブブチュルル・・・チンポって美味しいかも・・・」

夢中で頬張りながら、少しだけ横を向いてナナハと目を合わせるユミカ。

膝をついてしゃがみ、一列に並んだ男子たちの巨根を右手で掴みながら、亀頭からカプッと口に含む女子たち。

「・・・チュバチュブブウ・・・確かに・・・結構良いかも・・・ンジュブブチュブブ」

「んはぁ・・・んくう・・・」

眼をつむって快樂に肩を震わせる男子たち。

男子3人は頭の中で一面どこまでもひたすらピンク色のお花畑にいた。

「じゃあそろそろあたしたちのも舐めてよね・・・んっっ！」

女子たちはもっと舐めていたかったが、あえて男子たちの巨根から口を離し、今度は3人同時に自らのお尻を男子たちの方へと突きだすようにして向ける。

「分かった・・・」

男子たちは直立不動の状態からしゃがむ。

そうしないと、女子たちが突きだしたお尻に顔の位置が合わない。

結局、女子陣が男子陣のペニスを頬張っていた時と、意味としては同じ格好。

男子3人が膝をついて、女子の性器を後ろから舐めるのだ。

「んくちゅ・・・チュブチュブブ・・・ズチュルルルルルルルル」

激しい啜り音が響き渡る。

無我夢中で舐める男子たち。

そんなクニニ・フェラチオ合戦を繰り広げる男女のそばでは、相も変わらず誰も浸かっていない広い風呂桶のお湯がなお、延々とモーター機器によって循環を続けている。

「んはぁん！！ああ！ああああ！！！」

「ねえ！！みんなでっ！！みんなで湯船の中に入ってみようよお！！」

そんなナナハの提案に、女子二人とお尻を舐めていた男子たちも賛成した。

6人はそのまま熱い湯船につかりながらも、なおも激しい前戯を続けた。

「んくっ！！んちゅぶぶちゅ・・・」

口付け合う6人。激しいディープキス。それぞれがそれぞれの口を塞いで繋がっている。

——体験版はここまでです——